

与謝野晶子訳

源氏物語

夢の浮橋巻



一冊堂青空文庫

源氏物語

夢の浮橋

紫式部

與謝野晶子訳

明けくれに昔こひしきころもて生く
る世もはたゆめのうきはし　（晶子）

薫^{かおる}は山の延暦寺^{えんりやくじ}に着いて、常のとおりに経巻と仏像の供養を営んだ。横川^{よかわ}の寺へは翌日行つたのであるが、僧都^{そうず}は大将の親しい来駕^{らいが}を喜んで迎えた。これまでからも祈祷^{きとう}に關した用でつきあつていたのであるが、特に親しいという間柄にはなつていなかったところ、今度の一品^{いっぽん}の宮^{みや}の御病氣の際に、この僧都が修法を申し上げて著るしい効果を上げたのを見た時から、大きな尊敬を払うようになって、以前に増した交情を生じたために、重々しい身でわざわざこの山寺へ訪ねて来てくれたとしてあらんかぎりの歡待^{もてなし}をした。ゆるりと落ち着いて話などをしてゐる客に湯漬^{ゆづき}けなどが出された。あたりのやや

静かになったころ、

「小野の辺にお知り合いの所がありますか」

と薫は尋ねた。

「そうです。それは古くなった家なのでございます。私に朽尼くちあまとも申すべき母がありまして、京にたいした邸やしきがあるのでもありませんから、私が寺にこもっております間は、近くに来ておれば夜中でも暁でも何かの時に私が役だつことになるかと思ひまして小野に住ませてあるのでございます」

「あの辺は近年まで住宅も相応にあつたそうですが、このごろは家が少なくなつたそうですね」

と言つたあとで、薫は座を進めて低い声になり、

「確かなこととも思われませんし、またあなたへお尋ねしましては、なぜ私がそれを深く知ろうとするのかと不思議に思ひになるであらうしとはばかりれるのですが、その山里のお家うちで私に關係のある人がお世話になつてゐるということを聞きましたが、事実であるとすれば、そうなるまでの経路などもお話し申しておきたいと考えていましたうちに、あなたのお弟子にしていただいて尼の戒を授けられたということが伝わつてきま

したが、真実でしょうか。まだ年も若くて親などもある人ですから、私の行き届かない所からなくしたように恨まれてもしかたのない人なのですが」

と薫は言った。僧都は予期のとおりあの人はただの家の娘ではなかった。貴女きじよであろうとは初めから考えられたことであつた。自身で来てこれほどに言っておられる人であれば、深く愛された人に違いないと思うと、自分は僧であるにせよ、あまりに分別なくあの人の望みにまかせて出家をさせてしまったものであると胸がふさがり、返辞をどうすれば障さむりなく聞こえるであらうと考えられるのであつた。事実をもう皆知っておられるらしい、これだけのことがすでにわかっている上で、探りにかかられては何も何も暴露してしまうはずである、隠してはかえって迷惑が起るであらうという結論を僧都は得て、

「どういうことでこんなことが起こりましたかと、昨年来不思議にばかり思われていました方のことかと思われます」

と言ひ、

「小野の母と妹の尼が初瀬寺はせに願がございまして参詣さんけいいたしました帰りに宇治の院という所に休んでおりますうちに、母の尼が旅疲れで発病いたしましたして、重そうに見えると

申すしらせが私の所へあつたものですから、私も宇治へ出かけたのです。そうしますとあちらで不思議なことが起こつたと言いだしまして、母の介抱かいほうもさしおきまして、妹の尼はどうしてもこの方の命を助けたいと騒ぎ出しました。その若い病人も死人同様になっていました。がさすがに呼吸いきはあつたのですから、昔の小説の殯殿ひんでんに置いた死骸しかいが蘇そ生せいしたという話を妹は思い出しまして、そんなことかと私の弟子の中の祈祷きとうの上手な僧じょうずを呼び寄せましてかわるがわる加持をさせなどしておりました。私は、惜しむべき年齢としではないのですが、旅の途中で病みました母に、正念に念仏もさせて終わらせたいと仏のお助けを乞こうておりましてその人のほうはくわしく見ませんでした。何がそうさせていたかと思つてみますと、天狗てんぐ、木精こだまなどというものが欺いて伴つて来たものらしく解釈がされます。助けて京へ伴つて来ましたあとも三月くらいは死んだ人と変わらぬようだったのですが、以前の衛門督えもんのかみの妻でございました私の妹の尼は、一人より持つておりませんでした女の子をなくしましてから時はたつても、悲しみに沈んでおりましたのが、同じほどの年恰好としかつこうではありませんでしたし、非常に美しい人でもある人を拾うことのできましたのは、観音が自分へ下すつたのだと言つて喜びまして、氣も狂わんばかりに私へこの人の命を救えと頼むものですから、私も坂本さかもとへ下つてまいり、その時は私自身で祈

袴をし、護身法も行なってあげました。それから失心状態でも放心状態でもなくなり、次第によりしくなられたのでございますが、自身ではまだ憑かれたものの離れてしまわない気がする、これに妨げられずに未来の世界を思うようになりたいと私へ悲しいお話があったものですから、出家は自分のほうからお勧めもしたいことであるからと申して授戒を行なわせてさしあげたのでございます。あなたに御関係のある方などとは、空では悟りようもありませんでした。不思議な出来事なのですから、人にも話せば捜しておいになる方の注意を引くことになったかもしれないのですが、世間に聞かえては煩わしいことになるであろうと申して、妹の尼はそれをとめましたので、長く秘密にいたしてまいったのでございます」

こう物語った。いよいよ事実であったのかと薫は、小宰相から少し聞いた話から山へまで遠く僧都を尋ねて来たのではあるが、全然死んだと思っていた人が、確かにこの世に存在していたのかという驚きをまたも覚えて、夢の中の気持ちやし、心の打たれたことによつて涙ぐまれるのを、高僧を前に置いてこんな弱さを見せるものでないと反省され、冷静なふうを作っていたが僧都には、薫の感じていることがわかり、これほどにも愛していた人を、生きていても死んだのと同じような尼の身に自分はしてしまったと過

失をした気になり、罪を作ったという自責も覚えて、

「悪いものに魅入^{みい}られになったということも前生の約束事なのですよ。必ず高い家の子でおありになったのでしょうか。前生のどんなあやまちでさすらいの身などにおなりになったのでしょうか」

と僧都は問うてみた。

「王族の端とまあいうほどの人です。私も妻として結婚をしたわけではありません。あることが動機になって恋愛がそこへまで進んでしまった間柄でした。がしかし、そんなにまで人の好意にすがって養われねばならぬような待遇を私はしていたのではありませんのに、不思議に跡かたもなくなってしまったものですから、身を投げたかなどと、それによってまたいろいろな想像もしていたわけです。罪の軽くなる御処置をお取りくだすったのですから、安心のできたことと私は思うのですが、母親である人が非常に恋しがり悲しがっておりますから、それだけには知らせてもやりたく思いますもの、その結果長く隠しておいでになりました尼様の御本意に違い、断ち切れぬ親子の情で訪ねて行ったりすることになるかもしれぬと思われます」

などと薫は言ったあとで、

「御迷惑なことをと思いますが、その坂本までいっしょにお下りくださいませんか。細かい事実を承ることができましたあとで、なおそのまま捨てておいてよい人では初めからなかったのですから、夢のようなことを、この話を承った時を機としても話し合いたいと私は思うのです」

こう言う様子に、その人を深く思うことのうかがわれるため、出家遁世とんせいの姿になり、髪も髭ひげも剃そった僧たちでさえ恋愛の心のおさえられぬ者があるのである、まして女というものに戒行が保てるものかどうかあぶないものである、かえって罪に墮おとすことに自分は携はわってしまったと僧都は煩悶はんもんした。そして、

「下山しますことは今日明日さしつかえます。日が変わりましたらまいりまして、あちらからお手紙をお差し上げになるように計らいましょう」

こう答えた。薫はたよりない気もするのであったが、ぜひなどとしていることは、にわかにあせりだしたことに見られて恥はずかしいと思い、それではと言って帰ろうとした。姫君の異父弟は供の中にいた。他の兄弟よりも美しいその子を大将は近くへ呼んで、

「これがその人と近い身内の者です。この少年をせめて使いに出しましょう、短いお手紙を一つお書きください。私とは初めからお言いにならずに、だれか尋ね求めている人

があるということをお書きください」

と薫が言うのと、

「そのお手引きをいたすことで私は必ず罪に墮ちましよう。事實は申し上げたとおりです。もうあなたが今すぐお寄りになって、お話しになることをお話しになる、それは何の罪にもあなたのおなりになることではありません」

僧都はこう言うのであった。薫は笑って、

「あなたの罪になるようなお手引きを願ったと取っておいでになるのは誤解ですよ。私は今日まで俗の姿でおりますだけでも怪しいほど信仰を深く持つ男です。少年の時代から遁世の志を持っているのですが、三条の宮様がお一人きりで、私のような者一人をたよりに思召すのが断ち切れぬ絆きずなになりまして、そのまま今も世に交わっておりましてうちに自然に位などというものも高くなり、自身の意志にかなった生活もできないことになりますと、心は仏の道に傾きながら、行為は罪になるほうへ引かれても行っておりまして、それは公私のやむをえぬことに生じた枝葉ともいうべきことです。そのほかではこれは仏の戒めであると教えられましたことは、いささかのこともそれに触れたくないと心がけ、慎んでいまして、心の中は僧に変わりはないと信じる私です。ましてそれは

不善のはなはだしいものですから、どうして道にはいった人を誘惑したりすることをしましょう。お信じください。ただ逢いまして気の毒な母親の話などをよくしてやりますことができれば私の心が楽になることと思うからです」

と、昔から仏の教えを奉じることの深さを薫^{かおる}は告げた。僧都^{そうず}も道理であるとうなずき、尊い心がけであることをほめなどするうちに日も暮れたため、中宿りに小野へ寄ることはふさわしい道順であると薫は思ったが、突然に行くのはやはりよろしくなからうと考え、帰ることにきめた時、この常陸^{ひたち}の子を僧都は愛らしいとほめた。

「この少年に持たせてやります手紙に彼女の昔の知人のことをほめかしておいてください」

と薫が言ったので、僧都はさっそく手紙を書いた。

「ときどきは山へも登って来て遊んで行きなさい。私にあなたは縁がないのでもないからね」

などとも言った。少年は縁のあるという理由がわからないのであるが、手紙を受け取ってすぐに供の中へまじった。

坂本へ近くなった所で、

「前驅の者は列を分かれ分かれにして声も低くして行くように」

と大將は注意した。

小野では深く繁しげった夏山に向かい、流れの蜚はただけを昔に似たものと慰めに見ている浮うき舟ふねの姫君であつたが、軒の間から見える山の傾斜の道をたくさんの炬火たいまつが続いておりて来るのを見るために尼たちは縁の端へ出ていた。

「どなたがお通りになるのでしょうか。前驅の人がたくさんように見えますね。昼間横よか川わの方へ海布めの引乾ひきほしを差し上げた時に、大將さんがおいでになって、にわかきようわうに饗応しの仕度くをしている時で、いいおりだったというお返事がありましたよ」

「大將さんというのは今の女二にふたの宮みやのたしか御良人ごりょうじんでいらつしやる方ですね」
などと言っているのも、世間に通じない田舎めいたことであつた。

あの人たちが言うように実際大將が通るのであるうかと浮舟が思っている時に、かつてこれに似た山路やまみちを薫の通つて来たころ、特色のある声を出した随身の声が他の声にまじつて聞こえてきた。月日が過ぎれば過ぎるほど昔を恋しく思つたりすることは何にもならぬむだなことであると情けなく姫君は思い、阿弥陀仏あみだぶつを讃仰さんじやうすることに紛らせ、平生よりも物数を言わずにいた。

薫は常陸の子を帰途にすぐ小野の家へやろうと思ったのであるが、従えている人の多くのために避けて邸やしきへ帰り、翌朝になってから僧都の手紙を持たせてやることにして、きわめて親しく思う人で、おおぎようにならぬもの二、三人だけを付け、昔も宇治の使いをよくさせた隨身も添えてやるのであった。聞く人のない時に、その子を薫はそばへ呼んで、

「おまえの亡くなった姉様の顔は覚えているか、もう死んだ人だとあきらめていたのだが、確かに生きていられるのだよ。ほかの人たちには知らしたくないと思っているのだから、おまえが行って逢って来るがいい。母にはまだ今のうちは言わないほうがいい。驚いて大騒ぎをするだろうから、そんなことはかえって知らない人にまでいろいろなことを知らせてしまうことになるよ。母の悲しみを思つて私はあの人を捜し出すのにこんなに骨を折っているのだ。ある時まで口外するな」

といましめるのを聞いて、子供心にも、兄弟は多いが上の姫君の美に及ぶ人はだれもないと思ひ込んでいたところが、死んでしまったと聞き非常に悲しいことであるといつてもいつも思っているのに、こんなうれしい話を知つたのであるから感激して涙もこぼれてくるのを、恥ずかしいと思ひ、

「はあい」

と荒々しい声を出して紛らした。

小野の家へはまだ早朝に僧都の所から、

昨夜大将のお使いで小君^{こぎみ}がおいでになりましたか。お家のことなどくわしいお話を伺^{ほうぜん}って茫然となり、恐縮しておりますと姫君に申し上げてください。私自身がまいって申し上げたいこともたくさんあるのですが、今日明日を過ごしてから伺います。

こんな手紙が尼君へ来た。驚いて姫君の所へ持つて来て見せるとその人は顔を赤くして、自分のことが明らかに知れてしまったのであろうか、物隠しを続けたと尼君に恨まれてもしかたのない義理の立たぬことであると思うと、返辞のしようもなくそのまま黙っていると、

「今でもいいのですから言ってください。恨めしいお心ですね、私に隔てをお持ちになって」

と恨めしがるのであるが、何がどうであるかの理解はまだできないで、尼君はただわくわくとしているうちに、

「山の僧都のお手紙を持っておいでになった方があります」

と女房がしらせに来了。怪しく尼君は思うのであるが、今度のがものを分明にしてくれる兄の手紙であらう、使いでもあらうと思ひ、

「こちらへ」

と言わせると、きれいなきやしやな姿で美装した童わらべが縁を歩いて来了。円座を出す、御簾みすの所へ膝ひざをついて、

「こんなふうなお取り扱ひは受けないでいように僧都はおっしゃったのでしたが」

その子是这样言つた。尼君が自身で応接に出た。持参された僧都の手紙を受け取つて見ると、入道の姫君の御方へ、山よりとして署名が正しくしてあつた。

まちがいではないかということもできぬ氣がして姫君は奥のほうへ引つ込んで、人に顔も見合わせない。平生も晴れ晴れしくふるまう人ではないが、こんなふうであるために、

「どうしたことでしょう」

などと言ひ、尼君が僧都の手紙を開いて読むと、

今朝けさこの寺へ右大將殿がおいでになりました、あなたのことをお聞きになりましたため、初めからのことをくわしく皆お話ししました。深い相思の人をお置きになつ

て、いやしい人たちの中にまじり、出家をされましたことは、かえって仏がお責めになるべきことであるのを、お話から承知し、驚いております。しかたのないことです。もとの夫婦の道へお帰りになって、一方が作る愛執の念を晴らさせておあげになり、なお一日の出家の功德は無量とされているのですから、もとに帰られたあとも御仏をおたよりになされるがよろしいと私は申し上げます。いろいろのことはまた自身でまいって申し上げましょう。また十分ではなくてもこの小君が今日のことをあなたに通じてくださるかと思えます。

「#ここで1字下げ終わり」

書面を見れば事が明瞭めいりょうになるはずであっても、姫君のほかの人はまだわけがわからぬとばかり思っていた。

「あの小君は何にあたる方ですか、恨めしい方、今になってもお隠しなさるのね」

と尼君に責められて、少し外のほうを向いて見ると、来た小君は自殺の決心をした夕べにも恋しく思われた弟であった。同じ家にいたころはまだわんぱくで、両親の愛におごっていて、憎らしいところもあったが、母が非常に愛きょうだいしていて、宇治へもときどきつれて来たので、そのうち少し大きくもなっていて双方で姉弟の愛を感じ合うよ

うになっていた子であると思ひ出してさえ夢のようにばかり浮舟には思われた。何よりも母がどうしているかと聞きたく思われるのであった。他の人々のことは近ごろになつてだれからともなく噂が耳にはいるのであったが、母の消息はほのかにすらも知ることができなかつたと思うと、弟を見たことでいつそう悲しくなり、ほろほろ涙をこぼして姫君は泣いた。小君は美しくて少し似たところもあるように他人の目には思われるのであつたから、

「御姉弟なのでしよう。お話ししたく思つていらつしやることもあるでしょうから、座敷の中へお通ししましょう」

と尼君が言う。それには及ばぬ、もう自分は死んだものとだれも思つてしまつたのであるうのに、今さら尼という變つた姿になつて、身内の者に逢うのは恥ずかしいと浮舟は思ひ、しばらく黙つていたあとで、

「身の上をくらましておきますために、いろいろなことを言うかとお思ひになるのが恥ずかしくて、何もこれまでは申されなかつたのですよ。想像もできませんような生きた屍しかばねになつておりました私を、御覧になつたのはあなたですが、どんなに醜いことだつたでしょう。私の無感覚で久しくおりましたうちに精神というものもどうなつて

しまったのですか、過去のことは自身のことでありながら思い出せないでいますうち、紀伊守^{きいのかみ}とお言いになる人が世間話をしておいでになったうちに、私の身の上ではないかとほのかに記憶の呼び返されることがございました。それからの中にいろいろと考えてみましても、はかばかしく心によみがえってくる事実はないのですが、私のために一人の親であった母は今どうしておられるだろうとそればかりは始終思われて恋しくも悲しくもなるのでしたが、今日見ますと、この少年は小さい時に見た顔のように思われまして、それによつて忍びがたい気持ちにはしますが、そんな人たちにも私の生きていることは知られたくないと思いますから、逢わないことにしたいと思います。もし生きておりましたならば今申しました母にだけは逢いとうございます。僧都^{そうず}様が手紙にお書きになりました人などには断然私はいないことにしてしまいたいと思うのでございます。なんとか上手^{じょうず}にお言いくだすつて、まちがいだつたというようにおっしゃって、お隠しくださいませ」

と浮舟の姫君は言つた。

「むずかしいことだと思えますね。僧都さんの性質は僧というものはそんなものであるという以上に公明正大なのですからね、もう何の虚偽もまじらぬお話をお伝えして

しまいなすつたでしょうよ。隠そうとしましてもほかからずんずん事実が証明されてゆきますよ。それに御身分が並み並みのお姫様ではいらつしやらないのだし」

この尼君から聞き、姫君が女王様にようおうであつたということにだれも興奮していて、

「ひどく気のお強いことになりますから」

皆で言い合せて浮舟へやのいる室との間に几帳きちようを立てて少年を座敷に導いた。この子

も姉君は生きているのだと聞かされてきているが、姉弟らしくものを言いかけるのに羞恥しゆうちも覚えて、

「もう一つ別なお手紙も持って来ているのですが、僧都のお言葉によってすべてが明らかになっていますのに、どうしてこんなに白々しくお扱いになりますか」

とだけ伏し目になって言った。

「まあ御覧なさい、かわいらしい方ね」

などと尼君は女房に言い、

「お手紙を御覧になる方はここにいらつしやるとまあ申してよいのですよ。こうしてあつかましく出ていますわれわれはまだ何がどうであつたのかも理解できないでおります。だからあなたから私たちに話してください。お小さい方をこうしたお使いにお

選びになりましたのにはわけもあることでしょう」

と少年に言った。

「知らない者のようにお扱いになる方の所ではお話のしようもありません。お愛しくなさらなくなった私からはもう何も申し上げません。ただこのお手紙は人づてでなく差し上げるようにと仰せつけられて来たのですから、ぜひ手ずからお渡しさせてください」

こう小君が言うと、

「もつともじゃありませんか、そんなに意地をかたく張るものではありませんよ。あなたは優しい方なのに、一方では手のつけられぬ方ですね」

と尼君は言い、いろいろに言葉を変えて勧め、几帳のきわへ押し寄せたのを知らず知らずそのままになってすわっている人の様子が、他人でないことは直感されるために、そこへ手紙を差し入れた。

「お返事を早くいただいて帰りたいと思います」

うといふうを見せられることが恨めしく、少年は急ぐように言う。尼君は大将の手紙を解いて姫君に見せるのであった。昔のままの手跡で、紙のにおいは並みはずれな

までに高い。ほのかにのぞき見をして風流好きな尼君は美しいものと思つた。

尼におなりになつたという、なんとも言いようのない、私にとつては罪なお心も、僧都の高潔な心に逢つて、私もお許しする氣になつて、そのことにはもう触れずに、過去のあの時の悲しみがどんなものであつたかということだけでも話し合いたいとあせる心はわれながらもあき足らず見えます。まして他人の目にはどんなふうに映るでしょう。

と書きも終わつていないで次の歌がある。

法の師を訪ぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな

この人をお見忘れになつたでしょうか。私は行くえを失つた方の形見にそば近く置いて慰めにながめている少年です。

とも書かれてあつた。こう詳細に知つて書いてある人に存在の紛らしようもない自分ではないか、そうかといつてその人にも、願わぬことにもかかわらず變つた姿を見つけられた時の恥ずかしさはどうであらうと浮舟うきふねは煩悶して、もともと弱々しい性質のこ

の人はなすことも知らないふうになっていた。さすがに泣いてひれ伏したままになっているのを、

「あまりに並みはずれた御様子ね」

と言い、尼君は困っていた。どうお返事を言えいいのかと責められて、

「今は心がかき乱されています。少し冷静になりましてから返事をいたしましょう。昔のことを思い出しましても少しもお話しようなことは見いだせません。ですから落ち着きましたらこのお手紙の心のわかることがあるかもしれません。今日はこのまま持ってお帰してください。ひよつといただく人が違っていたりしては片腹痛いではございませんか」

と姫君は言い、手紙は^{ひろ}拡げたままで尼君のほうへ押しやった。

「それでは困るではありませんか。あまりに失礼な態度をお見せになるのでは、そばにいる人も申しわけがありません」

多くの言葉でこんなことの言われるのも不快で、顔までも上に着た物の中へ引き入れて浮舟は寝ていた。

主人の尼君は少年の話し相手に出て、

「物怪もののけの仕業しわざでしょうね。普通のふうにお見えになる時もなくして始終御病氣続きでね。

それで落飾もなすつたのを、御縁のある方が訪ねておいでになった時に、これでは申しわけがないとそばにいて気をもんでおりましたとおりに、大将さんの奥様でおありになったのでございますってね。それをはじめて承知いたしましたして、なんともお詫わびのしかたもないように思います。ずっと御気分は晴れ晴れしくないのですが、思いがけぬ御消息のございましたことでまたお心も乱れるのでしょう。平生以上に今日はお氣むずかしくなっていらいしやるようですよ」

などと語っていた。山里相応な饗応きやうおうをするのであったが、少年の心は落ち着かぬらしかった。

「私がお使いに選ばれて来ましたことに対しても何かひと言だけは言ってくださいませんか」

「ほんとうに」

と言い、それを伝えたが、姫君はものも言われないふうであるのに、尼君は失望して、

「ただこんなようにたよりないふうでおいでになったと御報告をなさるほかはありません

まい。はるかに雲が隔てるというほどの山でもないのですから、山風は吹きましてもまた必ずお立ち寄りくださるでしょう」

と小君^{こぎみ}に言った。期待もなしに長くどまつていることもよろしくないと想着て少年は去ろうとした。恋しい姿の姉に再会する喜びを心にいだいて来たのであったから、落胆して大將邸へまいった。

大將は少年の帰りを今か今かと思つて待つていたのであったが、こうした要領を得ないふうで歸つて来たのに失望し、その人のために持つ悲しみはかえつて深められた氣がして、いろいろなことも想像されるのであった。だれかがひそかに恋人として置いてあるのではあるまいかなどと、あのころ恨めしいあまりに輕蔑^{けいべつ}してもみた人であつたら、その習慣で自身でもよけいなことを思うとまで思われた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
